去程ニ、内裏ニハ同十九日、○平治元年十二月公卿僉議トテ催サレケリ、勸修寺左衛門督光賴卿、○略中荒海障子ノ北、萩ノ戸ノ邊ニ、弟ノ別當惟方ノオハシマシケルヲ招寄、○略中サテ主上○條ニ何クニオハシマスゾ、黑戸御所ニ、上皇ハ、一本御書所ニ、内侍所○鏡神ハ、温明殿ニ、劔璽ハ何クニ、夜ノオトヽニト、左衛門督次第ニ尋給ケレバ、別當角ゾ答ラレケル、

〔平治物語一〕主上六波羅行幸事

去程ニ、主上○條ニハ北陣ニ御車ヲタテ、女房ノ飾ヲ召シテ御鬘ヲ奉ル、同御寶物共ヲ渡シ奉ラントテ、内侍所ノ御唐櫃モ大床迄出シタリケルヲ、鎌田ガ郎等怪シメ奉リテ留進ラセケルヲ、伏見源中納言師仲卿ニ申合セテ、坊門局ノ宿所ヘゾ遷シ奉リケル、

〔愚管抄五〕八條太政大臣○平清盛以下さもある人々、世はかくてはいかゞせんぞ、信賴、義朝、師仲等が中に、まことしく世を行ふべき人なし、主上二條院の外舅にて大納言經宗、ことに鳥羽院もつけまゐらせられたりける惟方檢非違使別當にて有ける、この二人、主上にはつき參らせて信賴同心にてありける、そゝやきつゝ清盛朝臣ことなくいりて六波羅の家に有ける、とかく議定して六波羅へ行幸をなさんと議しかためたりけり、其使は近衛院東宮の時の學士にて、知通といふ博士有けるが子に、尹明とて内の非藏人ありけり、惟方は知通が聟なりければ一つにてありける、此尹明さかしき者なりけるを使にはして、言かはして、尹明は其頃は勅勘にて内裏へもえ參らぬほどなりければ、中々人もさらでよかりければ、十二月廿五日乙亥、丑の時に六波羅へ行幸をなしてけり、そのやうは、清盛尹明に細かに敎へけり、晝より女房の出んずる料の車とおぼしくて、牛飼ばかりにて下簾の車を參らせておき候はん、さて夜さしふけ候はんほどに、二條大宮の邊に燒亡をいたし候はゞ、武士どもは何事ぞとて其所へまうで來候なんずらん、其時其御車にて行幸のなり候べきぞと約束してけり、○略中内の御方、○條ニこの尹明候なれたる者にて、筵を